



は事実上不可能に近くお手上げの状態であり  
ます。新設農場ができなければSPF豚も増加し  
ないのでありますから、一般豚の豚舎をどのよ  
うにしてSPF豚舎に転換させるかということに  
なります。一部で実施されていますが問題が  
残ります。

次はGGP農場、GP農場の建設に対する投  
資の問題であります。最近の実例では数十億  
円の資金が投じられています。GGP 1頭か  
らPS豚を出荷するまでに2、3年かかり、  
厳密に選抜するとPS豚は多くても20頭前  
後しか出荷できず経費がかかるわりには酬  
われません。こんなところにPS母豚の飛躍  
的な増加が見込めない隘路があったのであ  
ります。

#### 生産費低下のための方策

それではどうしたらよいのか。解決方法は  
ただ一つ。国の公的資金の導入であります。  
国債残高が240兆円もあるのに民間で組織  
されている団体に補助金を支出することは  
できないと拒否されるでしょうが、米の輸  
入対策費には6兆円が支出されます。しか  
し米価は高値のまま下がらない。一体何の  
ために支出を決定したのか効果に疑問符  
がつきます。また種豚登録協会へは年間  
数億円の補助が出されています。したがっ  
て対策費の何分の一の金額が出せないはず  
がないと考えます。昔は農林省家畜改良課  
がSPF豚は改良に役立つ等理由でなかなか  
認知してくれず、学術会議で議題に上っ  
ても推進に力を貸してもらえなかった時  
代もありました。しかし30年経った現在  
では風向きが変わって、農水省も日本の  
養豚はSP化しなければならないと意識の  
変化が見られるようになりました。好機  
逸すべからず、全農をも含めた関係者は  
今こそ補助金獲得の運動を起こすべきで

あります。仮に種豚に補助があると子豚の  
価格が安くなり必然的に枝肉価格に影響し  
国際競争力がつくので養豚家は安心して  
生産に専念できます。今のままでは憂慮す  
べき事態を招来することになりかねませ  
ん。

#### 資質改良のための雄豚

価格もさることながら肉質も重要な問  
題であります。本誌第8巻に総食・根本社  
長が発表されていますが、20年前はSPF  
豚の歩留まりは35%ロースの芯はある  
かないぐらいバラ肉二枚取るのがやっと  
という情けないものが一部出荷されたこ  
ともあったでしょう。SPF豚はもともと  
閉鎖された環境で飼育されますのでとも  
かく近親交配に陥りやすく、当時は厚  
脂とロース断面積の改善に必死でした。  
種豚の増加を急ぐあまり淘汰しない不良  
豚が出荷されたものと思われます。現在  
は数万頭の母豚が飼育されているので  
こんな心配はありませんが、資質の改良  
のためには常に心がけなければならない  
ことでもあります。

GGPからPS生産のためにはランド  
レースと大ヨークシャの交配が一般的  
ですが、近年国内の種豚生産農家は極  
端に減少しています。特に大ヨークシャ  
、デュロックの優秀な血統保持者が  
なくなっているのが現状であります。静  
岡県中小家畜試験場において大ヨーク  
シャの系統造成が完了したとのことで  
ありますが喜ばしいことでもあります。

しかし最近の枝肉の傾向から見ると岡  
目八目ですが、大ヨークシャの血液更  
新が十分ではないような疑問を持ちま  
す。これはデュロックにも同様のこと  
がいえます。血液の更新のための種  
豚は現状のSPF豚種豚群の能力や成  
績より常に

高い能力と資質のものが必要となりますが、国内での調達が果たして可能であるか疑わしいのであります。

もともと大ヨークシャ、デュロックはアメリカより輸入したものでありますから輸入に依存すればよいのであります。価格の面とか疾病の問題とかいろいろと障害があります。かつてオーエスキー病は真偽は別としてハイポ豚が持ち込んだとも言われたこともありますのですべて輸入に直結することは危険であり、それなりの覚悟が必要であります。

以前は雄はハンブシャ種が主流であった時代がありました。しかしフケ肉等の問題もあり成績が今一つだったので、十数年前たまたま豚の品種の輸入が解禁された機会にデュロックを50頭程試験的に輸入したのが今やCM農場の代表的な雄豚になったのでありますから、今さらランドレース、大ヨークシャ、デュロックの組み合わせを変えることはできないでしょう。

背脂肪、ロースの断面積等SPF豚も避けて通れない問題であります。それだからこそGP農場は基礎豚としての雄の選抜に一層の留意が必要であり、血液更新に慎重に対処してほしいものであります。

#### 受精卵移植と冷凍精液

SPF豚は特定病菌を排除して作出されたものであるから、一般のCM豚に比較すると増体量飼料要求率事故率等いずれもすぐれており競争力がありますが、それは国内対比であってそれだけでは外国産の豚肉価格には通用しません。そこでコストダウンの一つの手段として登場するのが受精卵移植と冷凍精液であります。受精卵移植につい

ては千葉県畜産センター養豚試験場の宮原氏が発表されていますが、受精卵を介しての疾病伝播の有無の確認、受胎率、術式およびその取り扱い等の課題に若干問題が残されているということでもあります。技術的には完了してはいますから後は受胎率を高めることに注力すればよいので一層の研究を期待します。

冷凍精液については十年ほどまえに東京農大で研究されていましたが、現在では静岡大学で実験を完了実用化に踏出していますが、精液については受精卵移植と同じく疾病伝播の問題があります。豚と牛とは同じではありませんが牛の場合は冷凍精液が輸入され使用されています。豚にも利用する方法があるはずでありますから組織の固定化を望みます。国内の冷凍精液はすでに利用されていますが、種の保存といった消極的な目的でなしにもっと積極的に活用すべきではないでしょうか。先進技術の利用にはとかく躊躇するものがありますがGP農場には特に採用してほしいものです。

#### SPF豚肉のPR

最近、日本食肉消費総合センターがテレビで豚肉のコマーシャルを流しておられますが今一つ迫力に欠けているように思われます。メディアの影響は想像以上に大きなものでありますからO-157に揺れている昨今、SPF豚の肉が高品質で安心して食べられることを宣伝してはどうでしょうか。いささか便乗しすぎかもしれませんが消費者はSPF豚のことをあまりにも知らなさすぎました。以前、SPF豚には検定制度が確立していないのでSPF豚とは認められないと発言された人がいましたが、幸い現在ではGGP農場は勿論のことCM

農場まで認定され、その数も徐々に増加しております。

胸を張ってSPF豚肉の良さを宣伝すべきであります。30年来生産の向上一辺倒で走り続けてきたSPF豚関係者も、ここで消費者に対するPRを

精肉小売店まかせでなく自らの手で啓蒙すべき時期にあると思います。根本社長のように努力される人が数百人、数千人と増えればその時こそ日本全国にSPF豚の評価が高まるでしょう。

### ブタ・ア・ラ・カルト



マンガリッツァ Mangalitsa

ハンガリー原産の脂肪の付きやすい豚。品種名はロムニ語で「食べる」という意味の「mancare」に由来している。冬季に縮れた厚い冬毛が全身を覆う。耐寒性の強い品種。晩熟で一腹産子数が6～7頭と少なく、東欧諸国に分布するが飼育数は激減している

(写真・解説：正田陽一)